

地域と農業を結ぶ、ふれあいと絆の発信源

Agresh

2019. VOLUME.106

あぐれっしゅ

1

謹賀新年

特集①

新春座談会

地域農業の未来 協同の力で

女性目線で「食」と「農」を語る

特集② JA自己改革実践中!

シリーズ④地域の活性化



地域農業を
未来へつなぐ!!



「みんなのよい食プロジェクト」とは、これからの日本人にとって「よい食」とは何かを、日本の農家とJAグループ、消費者のみなさんと一緒に考えて、行動していく運動です。



腕 じ ま ん

地域じまんのモノ語り



2019亥年

あれこれ

子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥

「亥」は豚・猪などを表す象形文字で「核」を意味し、植物の果実が堅い種(核)を成してエネルギーを蓄積している様子を示します。十二支の第十二、動物では猪に配し、五行は水気。旧暦の十月、冬を象徴します。

猪は北海道や東北・日本海側の雪の多い地域を除き全国の山地に生息しており、古くから狩猟の対象とされてきました。また、多産であることから豊穡の象徴とも考えられていたようです。

亥年生まれの特徴

亥年生まれの人には芯が強く、一つのことに根気よく取り組むことができます。責任感もあり周りから信頼されますが、頑固な面もありますので反感を買わないよう注意が必要です。若いうちから計画的に資金を積み重ねていくことで、将来は安定した生活を送ることができるでしょう。

—お宮の暦より—

亥年の主な出来事

主な出来事	農業関連
1971年 (昭和46年)	●環境庁が発足し、公害対策が集中化されるようになった ●円変動相場制移行
1983年 (昭和58年)	●日本海中部地震が発生し、被害総額は518億円にのぼった。 ●東京ディズニーランドが開園した
1995年 (平成7年)	●世界貿易機関(WTO)発足 ●阪神・淡路大震災の発生 ●第1回東京マラソン開催(東京都庁スタート)
2007年 (平成19年)	●アメリカで初代iPhoneが販売 ●Googleが携帯電話専用検索エンジンの提供を開始
	●米の生産調整の本格的実施 ●日本の食糧自給率(カロリーベース)は58%
	●五九豪雪による記録的豪雪災害 昭和58年12月～昭和59年3月にかけて、太平洋側で被害が多発(死者131名、負傷者1,366名) ●食料自給率は52%
	●食糧法が施行され、米の流通の自由化、スーパーマーケットでの販売が可能に ●食料自給率は43%
	●食品リサイクル法の改正 ●食糧自給率は40%



Happy New Year 2019

次回外務予定日 2/13(水)～17(日)



地域農業の未来 協同の力で 女性目線で「食」と「農」を語る

JA十和田おいらせは、「農業者の所得増大」「農業生産の拡大」「地域の活性化」に向けた取り組みを「創造的自己改革」として実践しています。これらの取り組みには、農家と生活の主要な部分を占める女性の役割は大きく、JA事業も女性の活躍なくしては成り立ちません。今回の新春座談会では、女性農業者でもある4人をお招きし、女性目線から「食」と「農」、JA自己改革にどうかかわるべきかを語っていただきました。

❀一年を振り返り、JAにとって
どんな一年でしたか。

組合長 先般、2018年の一年の世相を表す今年の漢字として、「災」が発表されました。まさに災害と異常気象の一年だったと感じます。西日本の豪雨、北海道の地震など、被害は大きいものでした。幸い当JA管内は被害が少なく、販売部門では米が前年比3万俵の増、野菜も前年比で約6億の増。肉牛・子牛についてもここ2〜3年高値が続いていました。信用部門では、JA合併以来、一番多い貯金高800億円を達成し、当JA、農家にとっても良い一年になったと思います。

❀「JAがあつてよかった」と感じているところをお聞かせください。

竹内女性部長 JA女性部は「JAがあればこそ」の集まり。JAがあるから、地区の女性の仲間たちとのつながり、それが今の自分の力の源になっています。農家としても、農業に使う資材などJAに行けば何でもあり、なんとかなるという心強さがあります。2018年度は、女性部としても「JAのあり方」「女性の必要性」を学ぶ勉強会を開き活動してきました。

工藤理事 JA収穫祭などのイベントで販売している、女性部十和田湖支部の「きりたんぼ」が好評です。売り上げが伸び、より部員のやる気が増しています。青年部、JA職員の協力にも感謝し、強い絆を感じます。地元産米を使用していることから、「まっしぐら」のPRにもつながっていると思います。買ってくれた人の笑顔を見ると、女性部活動をしていて良かったと思うし、仲間や活動が自分にとっての財産となっています。

久野理事 今は息子に農業を経営譲渡しているため、栽培講習会に参加することがなくなりましたが、就農当初は、野菜を栽培する上でJAの栽培講習会が頼りでした。農作業をしている途中で作業のまま支店に行き、栽培の相談をしてアドバイスしてもらえるのが、とても心強かったことを思い出します。

斗澤常務 我々としても農家が栽培面でのことを気軽に相談できるよう、支店の指導力向上に職員自身も努力しています。

小笠原理事 協同組合とは、同じ願いを持つ人たちが組合員となって団結してその願いをかなえる組織だと教わってきました。都会で暮らしていた若い頃、「生きることは食べることに気づき、青森に戻り農家に嫁ぎました。そしてJA女性部に加入し、同じ願いを持つ仲間たちと米価運動など、様々なことを経験し学んできました。

JAは合併を何度か繰り返してきましたが、その仲間との団結は、その山が崩れることなく協同の力をさらに大きくできました。1999年に農家レストランを経験し、それから加工事業にも力を入れるようになってきました。そして女性部の無人直売所から、町の道の駅への出品につながり、面白さが増しているのはJAや仲間がいたからこそだと思います。

❀当JAが実践する創造的自己改革について、どのように感じ今後何が必要だと感じますか。

久野理事 担い手巡回を強化する「担い手パワーアップ・アクション」は、JA職員が畑に向いて農家の細かい要望や相談などを吸い上げている。普段思っているちよっとした事でも話やすく、そこから改善、改革につながっていきます。こうした取り組みは農家も本間に助かっています。組合員の高齢化が進み、大きな機械を扱う作物の栽培が難しい農家が増えています。そのため、1日も早い直売所施設の完成が必要だと考えます。高齢者や若い農家が取り組みやすい少量多品目の野菜栽培を促す働きかけ、栽培講習会の開催も必要と感じます。

工藤理事 今まで経営は夫任せでした。JAで学んでいくうち、家の経営面で足りないものにも気づくようになり「担い手パワーアップ・アクション」による指導員ら担当職員の巡回強化で、支店に出向かなくても済んだり、相談しやすくなったと感じています。また、巡回活動の報告内容や課題改善の方策などを経営者と職員が共有しています。JA全体、地域農業につながるところもある中で、共有し事業に反映させていることが重要だと思います。

小笠原理事 創造的自己改革。「創造」とは新しく作ること。色々勉強して感じるのは「女性の力」「女性の底力」が重要であり、まず必要になってくると思います。JAは直売施設を計画しています。女性部員のなかには道の駅、直売所などで、農産物のほか、加工品を販売し知識・経験もあります。みんなの力を合わせ、地域の人に地産地消の意義を教える「売れる直売所づくり」が今、一番必要だと思っています。「道の駅おがわら湖」では、私たち女性部上北支部を含む120人の農業者が出品し販わっていますので、私たちの経験が今後のJA直売所の建設に役立ててもらえたらと思っています。



出席者が持ち寄った加工商品、女性部活動の作品など

たけうち かつこ
竹内 勝子

東北町(上北支店管内)在住、
1953年生まれ。

就農45年。2017年、県JA女性組織協議会会長に就任。女性部上北支部長、当JA女性部長も務める。

農業経営
水稲1.1%、ナガイモ、ゴボウ、
産直用の各種野菜を生産



くどう えつこ
工藤 悦子

十和田市(十和田湖支店管内)在住、1953年生まれ。

就農40年。女性部十和田湖支部役員。2017年、当JA理事に就任。

農業経営
水稲4.5%
原木シイタケ5千本



ひさの れいこ
久野 礼子

十和田市(大深内支店管内)在住、1951年生まれ。

就農40年。女性部十和田支部副支部長、2014年に当JA理事に就任。

農業経営
水稲2.7%
ネギ「ほけしらす」1.6%
ニンニク1.5%、ゴボウ60%



おがさわら ひろこ
小笠原 廣子

東北町(上北支店管内)在住、
1947年生まれ。

就農48年。県JA女性組織協議会会長を歴任し2014年、当JA理事に就任。東北町の「道の駅おがわら湖」産直の会会長を務める。

農業経営
水稲12%、養豚2千頭、
産直用の加工商品を製造・販売。



**自己改革には
自らの意識改革も必要**



J A 女性部長 竹内 勝子

竹内女性部長：J A 自己改革は、自分の意識を改革しなければ進んでいけない気がします。農業者の高齢化が進んでいると言われる昨今ですが、高齢者になっても働き続けなければならぬ状況にあります。青森県は全国的に見れば、まだまだ若い後継者がたくさんいます。直売施設が実現すれば、女性をはじめ若い農業者、高齢の農家も出品でき、所得が増えれば生きがい、やりがいにもつながると思います。直売施設に人が集い、仲間が集まり、それがそれぞれのエネルギーにつながると思います。

組合長：「J A 自己改革」。農家の方々は今のところだか分からないと思います。我が J A は、政府に言われなくても以前より他の J A に先駆けて「農業者の所得増大」「農業生産の拡大」「地域の活性化」に取り組んできました。農家組合員が求めているのは、資材を安く、作った作物を高く売り、カントリー、野菜センターなどの施設整備を行うこと等、3つの要望が多い。その都度協議、実践してきました。特に J A は、積極的に農家へ足を運び、



営農力を高めなければ J A 事業は伸びません。各支店の担い手パワーアップ・アクションでは、直接現場で意見・要望を吸い上げ、迅速に対応するようにしています。7 年前からの取り組みで今年年間 5 千件以上、農家巡回し要望に応え、事業に反映させています。

農畜産物の有利販売では毎月、職員が首都圏の市場等に出向き市場調査し、高い方へ販売したり、また販路も広げ、その結果を理事会で報告をしています。農家支援では、土壌診断料金の一部助成、種苗費助成のほか、各種奨励金を年間 2 億円近く還元しています。そして県内最大の産地の維持、発展につなげています。地域貢献では、本支店で J A まつりを中心に地域交流を楽しんでもらい、また多くの職員が消防団加入、郷土芸能の継承にも携わっています。1 月から始まる組合員アンケート調査で、良い回答が得られると期待しています。

工藤理事：女性部十和田湖支部では、老人施設に出向き、利用者に「きりたんぼ作り」を教えています。米をこねる作業は部員が手伝い、箸に刺す作業を実際にやってもらいます。体験を楽しみ、たくさん食べてくれて喜んでいきます。そういった意味からも体験は必要だと実感しています。

**本日の意見を J A 事業に
どう生かしていくか。**

組合長：農家だけではなく、全国的に人口が減っています。後継者不足も深刻な状況の中、農家所得をいかに向上させるかが重要になっていきます。農家から所得増大への成果や効果を感じたりしますが、さらに所得がアップするよう今後も対策を講じていきます。注目が集まる直売所施設の建設は、場所等について春には報告したいと思っています。みんなに喜ばれる施設を作りたい。外部にも積極的に PR し、販売を伸ばし農家所得の増大に結びつけたいです。地域の土、水、緑、この豊かな環境を守るのは J A と農家のみなさんです。80 歳になっても、サラリーマンでも農業をやる人を応援する、頑張れるような環境づくりをするのが J A の役割。女性農業者や農業後継者の正組合員加入を勧め、J A 運営に参画してもらい、活躍する場を設けながら、一緒に地域農業を盛り上げていけたらと思います。

組合長：支店や支部ごとに実施していますが、それでは活動が見えにくい。年一回でも、みんなが集まって、おにぎりを作り、一緒に味わい「まっしぐら」の美味しさを知ってもらえるような活動ができればと思っています。



代表理事組合長 竹ヶ原 幸光
2011 年、組合長に就任。3 期目。

斗澤常務：「担い手パワーアップ・アクション」は、支店を拠点に巡回チームを作っています。他 J A は、担当部署を中心に動いているため、巡回件数を比較すると当 J A は効率よく多くの農家を巡回しています。日頃の業務で数多く農家巡回できる環境作りをすることが、迅速な対応につながり、J A 事業にも成果が出ています。

**女性農業者として、J A 自己改革に
どう携わっていくか、
農産物をどう PR していくか。**

竹内女性部長：J A 女性部は、地産地消推進運動の一環として、加工品作りを学び、商品開発に取り組んできました。J A の収穫祭や支店まつりなどに参加することで、「この地域には、こんな加工品がある」と地域にも浸透してきました。これからは、新たに独自の商品開発をしていきたいです。自己改革とは、自分自身の改革につながると 생각합니다。それぞれ考えて創造していけたらと思います。

産直施設の実現で地域に活力を



理事 久野 礼子

仲間、活動が自分の財産



理事 工藤 悦子

新たな一年の抱負を。

小笠原理事：産直施設のための商品開発に力を入れています。そして組合員、女性部加入することでのメリットを宣伝し、会員増につなげたいです。J A 運営に興味を持ち、参加してもらえよう呼びかけていきます。

久野理事：女性部員を増やすこと、自身も現役で農業を続けていくことを目標とします。

工藤理事：若い人たちの意見を聞き、部員増に向けた活動をするなど、女性部の仲間づくりを考えていきたいです。

**協同組合は団結し、
願いをかなえる組織**



理事 小笠原 廣子

工藤理事：よいものを安定的に生産することが、農家の使命だと思います。私は米を生産しているのです。たとえば「まっしぐら」を米粉にして販売できないかなと考えます。当 J A も輸出米に取り組み始めています。まっしぐらの良さを世界に PR して米の相場向上につながって欲しいです。

組合長：当 J A が生産した「まっしぐら」は、取り引き先の評価が高いです。物流も多く、品質も安定しているため、高評価につながっています。

久野理事：十和田市秋祭りでも披露している、J A 女性部の流し踊り、J A 収穫祭での農畜産物の販売を通じ、農家が元気にやっている、J A のアピールにもなっていると思います。J A 収穫祭では女性部、青年部も出店し、地元食材を使った「馬肉鍋」、地元産小麦「ねばりごし」を使った焼きそばなどを安価で提供し喜ばれています。地元の農畜産物の PR に向け、これからも継続していきたい取り組みです。

組合長：2019 年は、J A が合併して 10 周年を迎えます。農家組合員や地域住民が一緒になって盛り上げる企画を考えます。

斗澤常務：J A 収穫祭は地元のおいしいものを食べられ、にぎやかです。新鮮な農畜産物や加工品等を手軽に購入し味わえる。この地域には重要なイベントです。

竹内女性部長：女性部の現状維持も大事です。フレッシュコミュニケーション（若い人たちに、女性部加入のメリットを伝え、夢と希望、楽しみを与えられるような活動をしていきたいです）。

結びに

斗澤常務：私たちの地域は農業が基幹産業の地域です。そして家族農業が 9 割以上占めています。家族農業において女性の目線は、農業の現場で生育の繊細な変化に気づき、管理作業をサポートしている光景を目にします。日々の生活の中では自分で栽培した食材をどのように調理したら美味しくなるか、長期間保存できるか等意欲的に実践しています。また、地域の活動を通して仲間づくりや情報交換によりそのスキルが磨かれ、新たなチャレンジが農産物加工品やイベントを誕生させてきました。地域が活性化するためには農村女性たちが地域を巻き込み、活発に活躍できる環境をつくって行くことも J A の役割と考えます。今後女性の理事や組合員、総代等を含め、女性が J A 事業に参画することで創造的、自己改革が促進されることを実感する座談会となりました。



司会 斗澤 康広
当 JA の指導やさい部長を経て 2017 年、常務理事（営農経済担当）に就任。